



時をかける

大漁節

／親子4代で紡ぐ／

大漁を祝う、また大漁を祈願して歌われる「大漁節」。

日本各地の港町には、それぞれの地域の特徴が織り込まれた大漁節があります。市民の誰もが知っている地域のテーマソング「銚子大漁節」を紹介します。

イワシ漁の操業や干鰯場・メ粕作りの様子、メ粕や魚油を利根川に停泊中の船への積み込み、大漁で賑わう町の風景が表現された銚子の「大漁節」は、飯沼村の役人であった松本旭江と網元の網代久三郎、俳諧師の石毛利兵衛の3人が作詞。作曲は常磐津の師匠遊蝶、振付は清元の師匠、名妓（芸の優れている芸者）と評判であった、きん子が担当したといわれています。

大漁節は、「開新楼」をはじめとする松岸遊郭で踊り、歌われたことで、広く普及したと伝わっています。明治33年（1900）、「日本の古い歌謡」の中で小泉八雲

大漁節は、メ粕作りの経過も示す

イワシは食用だけではなく、実は肥料作りに多用されていた。イワシを煮て、しばらく干す「メ粕」は、『金肥』とも言われ、当時の農業を支えた。結果、大きな産業となり、銚子を豊かにした。その姿が大漁節の歌詞にも詠われています。



時を戻そう。

江戸時代はじめに大流行した「綿花栽培」の肥料に、乾燥したイワシ（干鰯）が最適でしたが、大きなイワシは乾燥する前に傷んでしまうため、「メ粕づくり」がはじまりました。メ粕づくりの副産物「魚油」は、利根川で江戸に。安価な油として市民の灯りになりました。

銚子の魚油で明るくなった夜の江戸では、にゅんと！鰯の臭いかな...

（ラフカディオ・ハーン）が漁師の数え歌として、歌詞を英訳して紹介しています。

元治元年（1864）の春、不漁続きだった銚子の浜に、イワシの大群が押し寄せたことを神様に感謝し、信仰していた白紙大明神（現在の川口神社）に歌や踊りを奉納するため「大漁節」が作られたというのが通説です。一方で、古い歴史の資料を解説する中で、この時代のイワシ漁は不漁が続く、現状を打ち破るため作られたという説も発表されています。

いずれの説でも、銚子では大漁節を祝宴の締めめの曲として歌い、踊られています。大漁節は、銚子市民にとってこれからも人々の幸せを願う最も親しみやすい民謡であり続けるでしょう。

〔参考資料〕郷土の文化財巡り学習資料「銚子正調大漁節考」（永澤謹吾）近年、市民の間で大漁節の文化的価値を評価する声も高まっています。

祭囃子に心も踊る。夏真っ盛り一緒に大漁節を踊ってみませんか？



誰でも気軽に踊りの輪に入れます
イベント情報は、市インスタグラム
ムも参考に



銚子市
Instagram



持宝院の盆踊り（長塚町）

小・中学校へ大漁節を

希望があった学校へ、太鼓演奏を披露し、踊りの指導や演奏体験のワークショップに伺います



進行方向：輪になり反時計方向に進む
小学生でも簡単に踊れます

詳しくは動画をご覧ください ▶▶▶



100年後も、銚子の大漁節が続くように

ひびき連合会
総帥 金島秀樹さん



ひびき連合会は、創立50年。前身の金島家長塚流から数えると136年。大漁節をはじめ伝統芸能を、幼児から80代まで、時を超えて継承しています。「親子4代、子守唄は鳴り物」と言える自分にとって大漁節はとても身近なもの。今後は、小・中学校と連携して、次の世代に大漁節を伝えていく取組を考えています。

見学自由。地域のひびき連合会へ気軽に大漁節を踊りに来てください。
申間 ひびき連合会 金島さん

☎ 22-5924

